

魔法の宿題 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名：岡本 崇 所属：大分県立別府支援学校 記録日：平成28年 2月 10日
キーワード： 肢体不自由 教科学習（国語・社会） 必要感 意欲 主体性

【対象児の情報】

○学年 小学部6年生

○障害と困難の内容

◎肢体不自由

■病弱（進行性骨化性線維異形成症）

〈身体の動きに関わる実態〉

- ・移動には電動車いすを使用している。重い、もしくはかさばる荷物を持つての移動は困難である
- ・関節の可動域が狭く、衝撃で症状が進行する可能性があるため、活動に制限がある

〈学習に関わる実態〉

- ・小学校の教育課程に準ずる教育課程で学習をしている
- ・書字速度は比較的速いが、長時間にわたると、字が乱れたり、疲労を感じたりすることが多い。また、板書や机上の教科書など、角度によって書き写しが困難になることがある
- ・操作を伴う学習（算数の図形問題など）では、理解が困難になることがある
- ・好きなこと、興味のあることに対しては意欲的だが、未習のことや経験の乏しいことでは意欲を失うことが多い。また、興味の範囲が狭く、テレビのヒーローなど、年齢に対してやや幼い傾向がある
- ・何かを問われた際に、適当に即答するなど、熟考しようとする意欲が乏しい

【活動進捗】

○当初のねらい（計画書の学習目標）と活動による方向性の確認状況

- ・自分の意思で決定する経験を多く積むことで、積極的に学習などの活動に取り組む
- ・自分の使いやすさに応じて、自分の意思で身の回りの環境を整える
- ・いくつかの方法を試行しながら、自分の学習しやすい方法を選択し、ノートなどを取る
- ・適切な形態での家庭学習の方法を探り、学習量を保証することで内容の定着を図る

○実施期間

- ・平成27年4月～2月（継続中）

○実 施 者： 岡本 崇

○対象児の関係： 担 任

【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

〈進路に関わる状況〉

- ・本人・保護者とも、身体の状況から、進路として本校の中・高等部を考えている。現時点では地域の中学校や高等学校への進学は考えていない

〈意欲面の状況〉

- ・学校内では、周囲が先回りして配慮をすることが多く、自分にとって必要があるものや有用なものなどを選択しようとする意思が乏しい。
- ・与えられた活動に対しては非常に意欲的に取り組むが、自分からしたいことを提案することは少ない

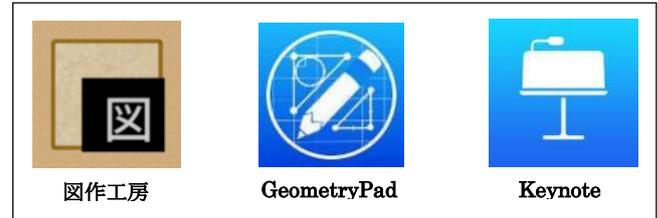
〈ICT機器の活用状況〉

- ・4年生から、情報入力的手段として、PCを使ったキーボード入力の仕方を学習している。
- ・これまでにiPadを「学習の道具」として活用したことはほとんどなかった

○活動の具体的内容

①手元の操作で学習活動を補完する活動

- ・動作の制限や可動域の狭さのために困難になっている課題（算数の図形問題など）を手元の操作で容易にできるように「図作工房」や「GeometryPad」、「Keynote」（編集画面）などのアプリを使って学習する



※上記の実践を行ったが、本人の使用感や、意識の面の高まりの様子から、活動を中止し、②・③の活動へと移った。詳細については後述する。



②生活上の「必要感」を持つ取り組み（活動の前提の再確認）

- ・ICT機器の使用の有無に関わらず、学校生活における（本人からの依頼に依らない）教師からの支援を極力排すことで、生活の中でどのような困難が生じるかを実感する
- ・学校生活の中で「困る」経験をすることで、自分にとっての困難な状況に気づいたり、それを解消するための支援への必要感を持ったりする

③「必要感」に応じて自ら困難を解決する手段を検討する活動

- ・困難が生じた際に、「他者にその都度依頼をする」「反復練習（学習）によって解消を目指す」「従来型の支援を依頼する」「ICT機器を活用し自分で解決する」という選択肢の中から、それぞれの手段で解決するのが適切かを検討する
- ・身の回りの環境が自分にとって活動しやすいものになっているかという視点で客観的に振り返る。「カメラ」アプリの録画機能などで、自分の身の回りの環境や車いす移動の動線などを撮影し、見直す。また、「Keynote」などのアプリ上で机やホワイトボードなどの配置を工夫して試行し、自分にとって最適な環境を自分で作る

※②③の実践を通して、「自分にとって必要なこと」を整理し、必要なことについては自ら求めようとする態度が育ってきたため、次の段階に進んだ。詳細は「対象児の事後の変化」の項を参照



④自ら試行錯誤をしながら、自分にとって使いやすいノートやワークを作っていく活動

- ・活動②・③で検討した内容をもとに、教科学習において困難になっている事項をまとめる
- ・教科ごとに学習しやすくするための要件を検討する
- ・「Word」や「OfficeLens」などを用いて、板書や教材、写真などをスキャンして取り込んだり、行数や枠サイズなどを自分で使いやすい形に変更したり



自分が最も使いやすいノートや家庭学習用プリントを本人が作成し、印刷して学習に利用する

⑤日記を書くことを通して、文章表現や漢字を学んでいく活動

昨年度から取り組まれていた、日記を書く活動を継続し、身の回りのことなど、想起しやすい事項を書くことを家庭学習として取り組んだ。まずは、場面ごとに写真や動画を撮影し、それを見ながら話すことで、「だれ」「どこ」「どんな」といった、基本的な事柄を押さえていった。その後、その写真を『Keynote』でスライド化し、「言ったこと」「思ったこと・気持ち」などを吹き出しで追加していくことで、作文としての構成がしやすいようにした。また、知らない漢字は『例解学習国語辞典』を使って調べ、新たに覚えたり書けたりした漢字は『Word』で自ら行ったポイント表に記入することで、成果を可視化し、意欲を高めるようにした。



○対象児の事後の変化

〈自分自身の困り感や必要感の意識について〉

本実践を開始するにあたって、学習において、身体の動きの制限のために困難となっていること（図形の作図や具体物操作など）を ICT の活用で解決することを目的として iPad を導入していた。しかし、取り組みを進めるにつれて、自分の身体の動作の制限などに困りを実感できておらず、一方的に支援が与えられている状況であることが判明した。本児は、これまでの経験から、自分の身の回りの環境を自分で整えたり、自分の使いやすさに応じて変更したりという経験をしたことはなかった。これは、周りの教員が「先回り」して、あらかじめ本人が困る状況にならないように配慮し続けてきたためと考えられる。このような経験の積み重ねは、自身の周りに存在する生活上の困難さを意識したり、必要な支援を考えたりする機会を奪っている可能性がある。そのため、一旦活動を中止し、まずはアナログ的手段で自分の生活を振り返り、自分がどのような状況にあるのか、どのような支援が必要なのかを実感できるような取り組みを行うこととした。



不要な支援器具を片付ける様子



学用品を手の届く範囲に配置する様子

〈必要に応じた環境の見直しと整理〉

- ・自分で身の回りの環境を写真や動画で撮影し、客観的に見直すようにした。そうすることで、自分の可動域に合わせた動きやすい動作に客観的に気づくことができた。それに合わせて、不要なものを片付けたり、動きやすい位置に荷物や学習の道具を置くようになった。また、教科書や筆記用具などのよく使うものをより自分に近い位置に置くなど、使いやすさから机上の配置を整理することができた。
- ・車椅子に iPad を装着して自分の目線と同じ視点（主観的視点）で撮影し、動画で見直した。そうすることで、車椅子で通ることができる通路の広さや状況を客観的に見直すことができた。また、それをもとに、より効率的に校内を移動するための動線を考えることもできた。このような経験を積み重ねることで、これまで自分でも気づいていなかった校内における支援の「必要感」を実感することができた。それをふまえて次の段階の活動へと移行することができた。また、校外学習などの校外における学習でも、自分で行動ルートを設定するように指導することで、同様に自分にとって必要な設備（身障者トイレやエレベーター、スロープなど）を意識し、自ら探すようになった。



写真を撮影して動線を確認する様子



自分で操作できるように iPad を装着



視線と同じ高さで動画を撮影する

〈学習における必要感からの見直し〉

- ・さらに視点を学習にも広げ、教科ごとに困難や必要感がないかを見直していった。事前にノートテイクのしやすさを確かめるため、「PC の物理キーボード」「iPad の画面タッチキーボード」「筆記」のそれぞれの書写速度を記録した。国語の教科書から抜粋した 89 文字の有意味語（ホワイトボードより書写）の視写を行ったところ、筆記が最も早く、3分30秒であった。これは、1分間あたり 25.42 文字となり、1分間あたりの 6年生男子の平均 30.14 文字と比較しても、顕著に書字速度が遅いということでもない、という結果であった。ただ、非常に疲れやすさがあることは考慮する必要があると考えた。また、保護者および本人から、

「字を書きたい（書かせたい）」という要望もあった。これらの実際的なトライアルの結果などから、児童自身が、授業で文字を追って視写するのは100文字程度までと判断した。それ以上は、写真に撮影して、それを手元で操作してアプリ内で活用したり、印刷してノートに貼るなどの手段を使いたいという要望を持つことができた。（この点については、実践を通して変遷が見られたため後述する）



それぞれの文字表記の方法を実際に試し、自分にとって最も使いやすい方法を検討する

これらの結果から、必要感に応じて児童自身で以下のようなまとめをすることができた。

【対象児がまとめた授業における支援の必要性の視点】

[教科書・辞書について]

- ・ 基本的には紙媒体の方が好き
- ・ 国語辞典はアプリの方が扱いやすい
- ・ 教科書は、ページをめくる回数が多いものはPDF化した方が扱いやすい（国語）

[ノートテイクについて]

- ・ 基本的には手書きの方が好き。ワーク類は手書きでしたい
- ・ 板書でポイントを明示している場合など、文字数が少ない場合は手書きが適している（算数・理科）
- ・ 全体像をつかむ必要がある板書は写真で撮影した方が適している（社会・国語）
- ・ 自分で板書や教科書の挿し絵が入った書き込み式のワークブックを作りたい（社会）

このような「視点」を本人が持つことで、将来的に自分に必要な支援を（教科ごとに）依頼することができるようになる可能性が広がったと考える。

〈必要感に応じたノートやワークの作成〉

- ・ 前述の視点に沿って、教科ごとに、より自分の使いやすいノートやワークシートの要件を考えた。その結果は以下のまとめのとおりである。

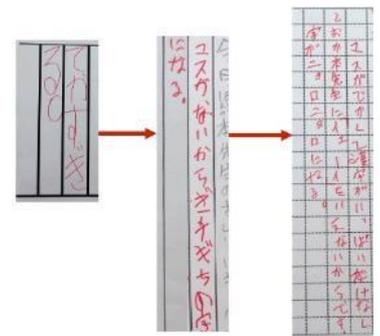
【使いやすいノートとして本人が考えた要件】

- ・ 板書の写真を貼るスペースがある
- ・ 教科書の挿し絵や動画教材のスクリーンショットを貼るスペースがある
- ・ 印刷してポイントを手書きするスペースがある



使いやすいノートの要件に沿って下書き

- ・ あらかじめ自分で考えた「使いやすいノートの要件」に沿って、自分専用のノートのフォーマットを考え、検討した。教師がテンプレートとして枠線や罫線の画像を複数用意し、その中から自分の考えるノートの要件に近いものを選択していった。それをWordで編集し、自分の考えた通りにそれらの枠線などを配置してノートのフォーマットを作っていった。
- ・ 実際に作ったノートを印刷し、授業で活用していった。実際にノートを使っていく中で、その使用感を確かめていった。「罫線がないほうがよい」「マス目の方がよい」「枠線がもっと狭いほうがよい」など、自分の使いやすさから検討し、少しずつノートのフォーマットを改善していった。2月現在でNo. 4のノートを使っており、今



自作のノートのフォーマットの変遷

後は中学部進学を見越して、必要感に沿って改善していく予定である。

- ・前述の、本人が考えた「教科ごとのノートテイクの仕方」に沿って、筆記とキーボード入力、板書や教科書の写真撮影（スキャン）の3つの方法を使い分けていった。スキャンでは、OfficeLensを活用した。自分で

角度などを工夫して作った「教科書専用のスキャン台」

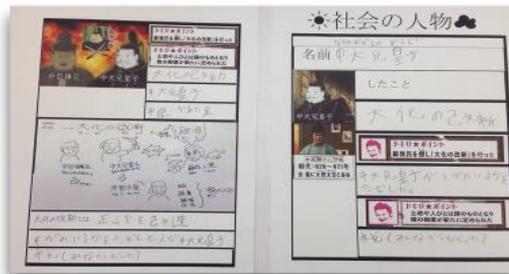
を使って、必要に応じて挿絵や本文をスキャンしていった。

スキャン画像や動画教材のキャプチャ画像、板書の写

真などをWordで作ったノー

トに画像化して貼り付け、整理するようになった。

- ・授業中に作成したノートは、その都度印刷して家庭に持ち帰り、宿題として活用した。また、ストックしていったものを自ら振り返ることで、繰り返し復習用のワークとしても活用している。



授業で作った社会科のノートの例



自作スキャン台での教科書スキャン

〈学習上の成果〉

☆国語科における成果:毎日書いている日記で漢字を書いた文字数をポイント化し、成果を可視化することで、意欲を持って取り組むようになった。また、漢字がわからない際の調べ方、といった困難に対応する方法を明確にしたことで、確実に取り組めるようになった。それに伴って、年度当初は文字を書くとき非常に疲れやすい様子だったが、書くこと自体に慣れ、連続して書ける文字数も増加していった。その結果、4月時点での1日分の日記の文字数の平均が133、漢字数の平均が9（本文内の漢字含有率6.8%）であったが、1学期末にはそれぞれ194・35（18.0%）、2学期末246・35（19.9%）、3学期末262・67（25.6%）と向上していった。また、5年生までに習った漢字825文字の読みテストでは、4月当初は238/825だったが、1学期末は406/825、2学期末は557/825、3学期では630/825まで向上した。（H28.2.8 現在）

また、累計した漢字・表現のポイントについては、学期ごとに自己目標を設定していった。1学期の目標は累計で2000ポイント（文字）だったが、到達数は3068ポイントだった。これをきっかけに意欲を増し、2学期は10000ポイントの目標に対し到達数

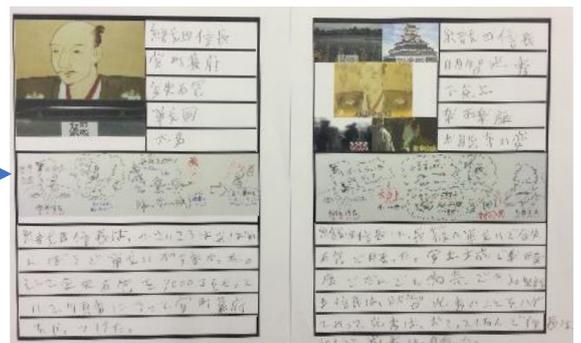
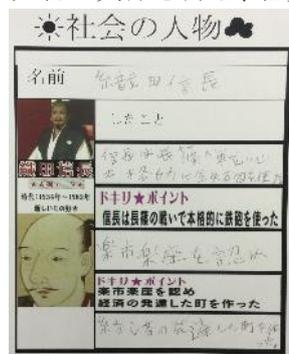
13624ポイント、3学期の目標17000ポイントに対し到達数17041ポイント（継続中）と、成果を伸ばしていった。目標に到達するたびに意欲が増し、さらに目標を高く設定したり、目標達成のための工夫（ポイント表の作成・掲示、文字数を増やした日記用紙の作成など）を自分で行った。



自分で設定し、机上的の見やすい位置に設置して可視化したポイントボード

☆社会科における成果:歴史上の人物に興味を持ち、自分で『Word』を使ってワークシートを作った。NHK for

Schoolの動画教材の画面のスクリーンショットや、教科書の挿絵、板書の写真などをテンプレートに貼り付け、印刷して要点を手書きするワークシートを作った。毎日の家庭学習で繰り返し活用することで、歴史の流れの概要をつかむことができた。また、この学習をきっかけ、歴史上の人物に非常に興味を持ち、インターネット



自分で調べたことを追記するために自分で拡大したワークシートの枠

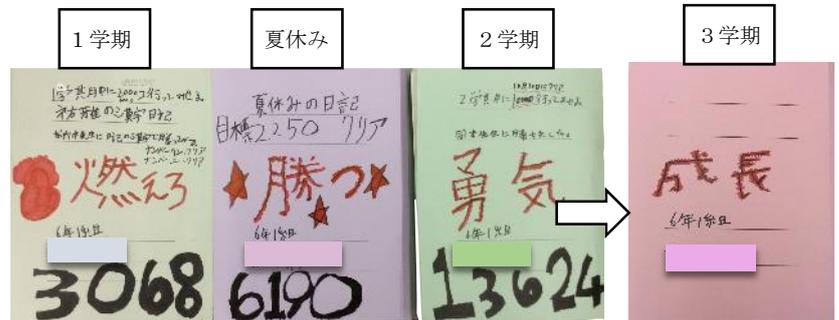
を使って調べたことを追記するために自分で拡大したワークシートの枠

で検索して自分から予習をするなど、積極的な姿が見られるようになった。例えば織田信長について学習した際には、インターネット、テレビ、学習漫画など、身の回りのあらゆるメディアを積極的に使って調べた。これは、学びの方法を確保できたために実現したことだと考える。それらをまとめるためにワークシートの枠を作り直して拡大するなど、さらに意欲的な姿も見られた。

○報告者の気づきとエビデンス

〈意欲の高まりと変化〉

学習に対する意欲が高まるにつれて、積極的な姿が現れるようになってきた。例えば漢字の学習においては、1学期の段階では、「教師と漢字のポイントを競い、勝つ」ということがモチベーションになっていた。しかし、ポイント数を表にして可視化することで、学習の達成度そのものへと意欲の方向が変化していった。自分の「成長」を実感したためと考えられる。「成長」という言葉は、本児からことあるごとに聞かれるようになった。



日記のファイルのタイトルの変化から見る、モチベーションの変化

〈困難を解決する手段の選択について〉

本実践を通じて、困難が生じた際の解決の手段を以下の4つに分類して選択するように指導を行った。

- i) 他者にその都度依頼をする
- ii) 反復練習（学習）によって解消を目指す
- iii) 従来型の支援を依頼する
- iv) ICT 機器を活用し自分で解決する

この中で、本実践において新たに本児に必要感が生じたのは i と iv の選択をする場面であった。また、iv の選択を受けて、ICT 機器を使うスキルを身につけるためには、必然的に ii の選択をせざるを得ない状況があった。ここでは、前項までで記述した以外の場面から、本人がこれらの選択をした際の特徴的なエピソードを挙げ、本児が必要感に応じた選択をすることができたかについて評価する。

☆ICT 機器を活用し自分で解決する場面…これまでの実践の中で学んできた方法を使うことが多いため、ほとんどが教科学習での場面だった。特に、教科担当制で他の教員が担当している理科や音楽、図工においても、学習の板書の撮影や学習の様子や教材などの写真や動画の撮影を自ら行うことができていた。



☆他者にその都度依頼をする場面



……これまでは、給食・トイレでの介助など、日常生活面がほとんどだった。しかし、i の場面では他の教科担当教員の授業で ICT 機器を活用したい場合は、その旨を依頼しなければならないため、場面によって都度依頼する必要感が生じていた。また、機器そのものの使い方がわからない場面や、自分の使いたい機能を教えてもらう場面では、その都度自分からたずねていた。

☆反復学習によって解消を目指す場面……



ICT を活用する上記のような場面では、自分で「この使い方を身につけることが必要」と感じた際には繰り返しの練習を行って身につけるといった選択をしていた。

本実践以前はほとんどの場面で教員が先回りの支援をしてきたため、困りそのものを感じる事が少なかった。しかし、本人が必要と感じた場面では、上記のような選択をすることができたことから、必要感が生じた場合は、自分で解決の方法を選択して行動することができるようになったととらえた。

〈必要感に応じた活用のエピソード1：地域間交流での様子〉

地域の小学校との交流を行った。本人の希望で、国語と算数の授業に参加した。当日の授業では、机の配列などが事前に想定していた形態とは異なっており、これまでに本校で行ってきた仕方でのノートテイクができなかったが、その時の状況に応じて、自分から国語辞典やカメラなど、複数のアプリを使い分けて対応することができた。休憩時には、寄ってきた友達に自分が授業で使っているアプリや自作のノートを見せるなどして盛り上がっていた。



状況に応じた iPad の活用

〈必要感に応じた活用のエピソード2：けがをしてギプスを装着していた（動きが制限されていた）際の様子〉

利き腕を怪我して動かせなくなった際には、自分でその時に必要な環境を工夫して作ることができた。例えば、手が伸ばせないため、リーチに応じて机上の学習用品の配置を工夫、iPad の操作をいつもと違う姿勢で行うための肘置きとしてクッションを活用、音声入力の活用（これまで、試用はしたものの実用には至っていなかったが、手を動かせないため限定的に活用した）など、その時の必要感から、試行錯誤して活用していた。



腕をけがした際の iPad 活用の工夫

〈必要感に応じた活用のエピソード3：修学旅行の様子〉

1学期の校外学習の際、それまで教師や保護者が行ってきた「行動ルートの確保」を行わず、本人に行動ルートを任せました。そこで、公共の場所では、エレベーターの場所の確認や、車椅子が通れる動線の確保を行う必要があることを理解していた。修学旅行の事前学習では、そのときの経験を思い出し、パンフレットやインターネット上の施設内地図を見て、自ら「エレベーターの場所」「バリアフリートイレの場所」「動線の確認」などを行った。その上で、パンフレットにエレベーターの場所やルートなどを書き込んで写真に撮り、iPad で持ち歩いた。修学旅行当日は、それを見ながら、移動の車中で見学地のルートを確認したり、友達を先導して行動したりする様子が見られた。



事前にパンフレットでルートを作成し、現地で確認をする様子

移動の車中で見学地のルートを確認したり、友達を先導して行動したりする様子が見られた。

〈その他のエピソード：欠席時の様子〉



FaceTime での遠隔授業

体調不良で長期（2週間）欠席をした際、家庭で退屈だということを電話で伝えてきた。通院帰りに学校に立ち寄った際、別室で行われている ALT のクリスマス飾り作りを FaceTime で遠隔授業体験したことで意欲が増し、自分から遠隔授業を要望してきた。その際に「友だちと話がしたい」「学校の様子を見たい」「社会と家庭科の勉強をしたい」ということを伝えてきた。そこで、社会科の授業は FaceTime でのリアルタイムの遠隔授業、家庭科については、学習の様子を動画で撮影して見るという学習方法をとった。また、3学期にインフルエンザで出席停止になった際にも、FaceTime での遠隔授業を要望した。また、「漢字ポイントの目標数を達成するため」という理由から、日記の宿題プリントも要望した。



また、3学期にインフルエンザで出席停止になった際にも、FaceTime での遠隔授業を要望した。また、「漢字ポイントの目標数を達成するため」という理由から、日記の宿題プリントも要望した。

※※欠席時の学習に関しては、保護者の了解及び確認のもと、体調に応じて取り組んでいる※※

〈対象児本人のキャリア意識の変化〉

年度当初は、小学部卒業後の進路をたずねられると「わからない」「知らない」と答えていた。しかし、2学期以降、中学部の先輩の様子を見たり、中学部での授業の様子を先輩にたずねたりするなど、意識をするようになってきた。3学期になってからは、さらに先輩への質問が「どんな勉強をするのか」「テストにはどんな内容が出るのか」と、具体的になっていった。また、「中学部でも漢字や社会の勉強にがんばる」という言葉がよく出るようになった。これは、学習を進める中で、興味の範囲と意識が広がったことで、自分の可能性に気づいたことが大きいと思われる。経験の範囲を広げることが、意識できる世界を広げ、意欲の対象を広げたのだろう。一方で、高等部卒業後の姿については、まったく意識ができていない現状がある。これは、まだ遠い将来のこととしてとらえて意識が向いてないためだけでなく、病気に対する本人の理解がまだ進んでいない（保護者も担任も、将来の姿を正確に描き切れていないことに由来）ためでもある。タブレットという、外界とつながる手段を持った今、どのように自分の病気や身体と向き合うようになるか、今後の指導が必要である。

〈保護者の目から見た成長の様子〉

母親は、本児の様子を見て、「自分が『成長』したと実感できたのでしょよね」と、キーワードである『成長』という言葉を使って表していた。また、成長の具体的な様子として、「自分から宿題に取り掛かるようになった」「どんな時でも宿題をするようになった」「歴史上の人物など、興味の対象が広がった」「ニュースや情報番組などを見るようになった。また、わからない言葉はiPadで調べるようになった」などを挙げていた。

〈課題に対して「意欲を持つ」ためのプロセス〉

本実践を通して、課題に対して意欲を持つためには、以下のようなプロセスを確保することが必要だと考えた。

【課題に意欲を持つプロセス】

- ① すべきことを的確に把握（本人にとっての必要感）
- ② 課題を進めるための方法を確保
- ③ 困難があった場合の解決法の確保
- ④ 目標達成の姿のイメージ化
- ⑤ 「達成感」を得られるための仕組みの構築

〈本児の学力向上とICTとの関連について〉

本児の学力の向上の最大の要因は、「学習に対する意欲の向上」であると考えられる。つまり、ICTによって獲得した力というより、彼自身が本来持っていた力であると言える。つまり、彼にとっては適切な学習の機会を得たことが成長の要因であったと考える。しかし、学習の機会を得ることと、適切な学習の方法を得るための手段として、ICTの存在は非常に大きな役割を果たしていたと言える。

○今後の見通し

今回の事例のように「困り」「必要なこと」に自ら気づき、発信する機会の確保をすることは、将来に向けて絶対に必要な条件と考える。特に、来年度より中学部に進学する本児にとって、教科担当制の授業において、必要に応じて合理的配慮を得るためには、教科および担当ごとに、自分にとって必要となる配慮とその合理性について、自ら申請する必要があるからである。本実践での経験が、児童自身の意識を育てることになったと思われる。また、将来的に症状が変化し、身体の動きや制約が変わることも想定されるが、どのように対処すべきかを自ら考える手がかりとすることができるであろう。今後も、その時々々の必要感に応じて試行錯誤しながら、状況にあった活用ができるように支援していきたい。

また、本人が保護者と相談して、自分専用のiPadを購入したため、「学校での使い方」に加えて、「家庭での使い方」や「社会での使い方」についての責任感も増してきている。その点についても、今後も中学部の担任・教科担当と連携しながら、より社会でも自分の力として活用できる状況づくりに努めたい。

【資料：本実践におけるアプリ決定の意図と使い方】

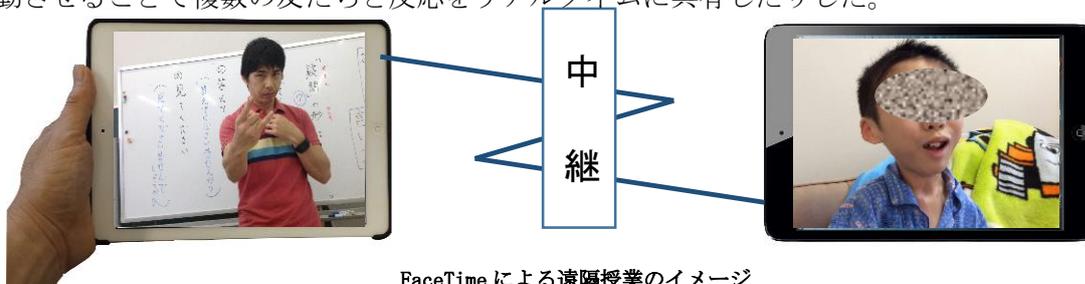
本実践においては複数のアプリを選定・活用しているが、本来的な使用法とは異なる工夫をしているものがある。そこで、資料として、本実践でどのような意図でアプリを選定・活用しているかを解説する。



FaceTime：ビデオ通話アプリ。リアルタイムにビデオ通話が可能。

【対話型遠隔授業での活用】

カメラの向きや固定方法を工夫することで対話型の遠隔授業を行った。板書を接写してノートテイクしたり、カメラを移動させることで複数の友だちと反応をリアルタイムに共有したりした。



FaceTime による遠隔授業のイメージ

Word：ワープロアプリ。iPad 版ではカメラロール内の画像を簡単に文面に挿入できる。

【ノート・プリントのフォーマット作り】

カメラロール内にあらかじめノートの罫線やマス目などのデータを画像として保存しておくことで、Word 上で自分で組み合わせてフォーマットを作れるように工夫した。

OfficeLens：スキャンアプリ。板書などを撮影すると角度補正などをした画像にすることができる

【復習用プリント作り】

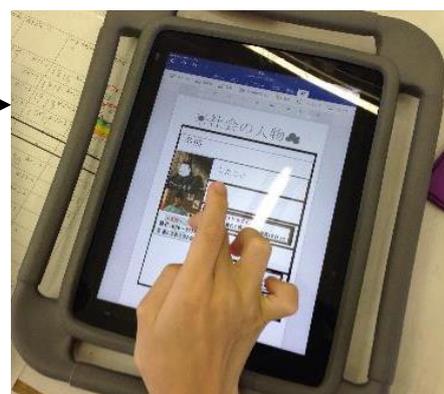
板書や教科書の挿絵、動画教材（NHK For School）の画面のスクリーンショットなどを撮影し、デジタルデータとしてカメラロールに保存することで、Word で作成した教材フォーマットに貼り付けられるようにした。それを印刷することで、家庭学習で使う復習用プリントを作ることができる。



罫線やマス目を画像化してカメラロールに保存



OfficeLens で画像データ化



Word で組み合わせて自分でプリントを作る

※中学部への進学時を考慮して、教員になじみが深く、パソコンでの使用に慣れている Office のアプリを選択した。これによって、たとえ iPad の扱いになじみのない教員であっても、データや活用法の引継ぎをスムーズに行うことができ、支援を継続できると考えた。